

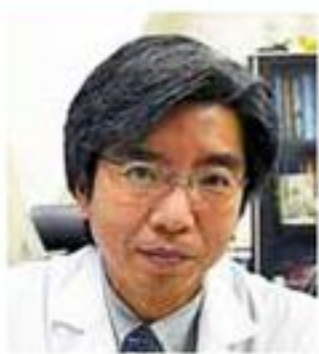
取材の日も、東京慈恵会医大教授の大木隆生(51)は手術室に立っていた。年間400件の手術をこなす。首や足の血管がつまる動脈硬化症や大血管が膨れる大動脈瘤を治療する血管外科医。ステントグラフトと呼ばれる血管を補強する医療部材を巧みに挿入する技術を持つ。

11年間滞在した米国から2006年に帰国した。米アルバート・アインシュタイン医大教授のころには、4年連続で「ベストドクター」に選ばれた「神の手」を持つ外科医である。

医療ベンチャーの日本医療機器開発機構(JOMDD)の特別顧問でもある。「JOMDDは日本の医療機器開発に足りなかった最後のピースを埋める」と大木は言う。

日本では医療機器開発に取り組む医者も少ないが、メーカー側にも経験がない。両者のニーズとシーズ(技術の種類)とを専門知識をもった会社がつながなければならぬ。そんな役割をJOMDDに演じてもらいたい、と大木は考えている。医療分野で欧米に後れをとるものづくり大国の日本に、その力はあるのだろうか。

大木が渡米した95年ごろ、外科医は金網状のステントと布状の人工血



医師考案の器具 匠の技で作る

「神の手」とつくる ③

管をあわせたステントグラフトを手づくりしていた。大木がつくると出来栄は良く、評判になった。へ日本のものでづくりの匠がつくれれば、もっといいものができるはず。

弘法は筆を選ばないが、外科医は使う道具を選ぶ。

例えば、手術用はさみで患部組織を切り、血がにじむと、はさみをピンセットに持ち替えて、出血部をつまみ、止血する。組織の一部をしっかりと持ち替えて、はがしたりする際もはさみをピンセットに持ち替える。

へはさみの先端にピンセットのようにつまむ機能があれば、看護師と器具を交換する作業はなくなる。手術のリズムが良くなり、より早く、安全な手術につながる。大木はそう考え、図面を書いた。その他にもいろんなアイデアが浮かんだ。

医療機器代理店、ディーブイエックス(DVX、東京)にメーカー探しを依頼した。大木が求める精度、使い勝手を実現する会社が見つかったのは、昨年夏。12年4月に手術用はさみなど医療機器分野に参入した眼鏡枠製造大手のシャルマン(福井県鯖江市)だった。その後、シャルマン、DVXにJOMDDも加わり、3社で国内、海外で新しい医療機器を売り出す態勢ができた。7月1日から大木が考案した手術用器具が「大木インペンツ」というブランド名で売り出された。

医療分野でニーズとシーズをつなぐ試みが始まった。だが、新分野に参入したシャルマンにとって、それは決してたやすい道ではなかった。

敬称略(編集委員・安井孝之)

この連載への意見は「keizai

@asahi.com.jp」。

大木隆生・東京慈恵会医大教授 東京都港区
シャルマンがつくる手術用はさみ。はさみの先端に小さなピンセットの機能がついてくる